

身延に関する紀行について

秋 山 智 孝

一、本年は身延山開闢七百年の記念すべき年であるので全国から多数の僧俗が参拝登山する事と思う。大聖人が身延に入られたのは文永十一年五月十七日であるが、同年七月二十六日付の上野殿御返事（昭定八一九）には、鷲目十連かわのり二帖しやうかう二十束給候了。云々とあり、御入山直後から登山が始まっておる事が知られる。大聖人在山中に如何なる弟子信者が、如何なる目的、如何なる気持で登山したかは御遺文によって知る事が出来る。

大聖人滅後身延に参詣した僧俗の数ははかり知れないが、初期においては日蓮が弟子檀那等はこの山を本として参るべしの御遺訓による信仰中心の登山であった。時代を経るにしたがって、参詣者も、イ 信仰中心、ロ 信仰と名所見物、ハ 名所見物中心、の三つの形があらわれて来た。これらは教団の発展や信仰心の消長、庶民の名所見物、物見遊山の流行等に関係があるが、その問題は他にゆずるとして、交通機関の未発達時代に山深き身延の山に一体如何なる気持で参詣したか、如何に難渋したか大変興味をそそられるところである。この疑問に答えてくれるものとして紀行（旅日記）がある。

二、身延に関する紀行として第一にあげられるのは富木殿御書（昭定八〇九）である。これは消息文ではあるがむしろ紀行文とするのが適當であると思う。

十二日さかわ、十三日たけのした、十四日くるまがへし、十五日ををみや、十六日なんぶ、十七日このところ。いまださだまらずといえども、たいしはこの山中に叶て候へば、しばらくは候はんずらん。結句は一人になって日本国に流浪すべきみにて候。又たちとどまる身ならばけさんに入候べし。

けち申ばかりなし。米一合もうらず、がししぬべし。此御房たちもみなかへして但一人候べし。このよしを御房たちにもかたりさせ給へ。

簡明直截読む者の肺肝を射る名文である。

身延に関する紀行についての研究は、山上、泉「江戸文芸に現れたる身延山」(昭和九年身延教報)があげられる。右の中にあげられた身延もうでの文献は、

身延道中録(写本)、身延道中雙六(安重)、身延ぐるま、身延道中、金の草鞋(十返舎一九)、身延往来(寺小屋教科書)、身延参詣里程表、身延紀行(中村経年)、身延参詣(円亭九孤)、身延参詣膝栗毛(仮名書魯文)、身延道の記(元政上人)、安永身延紀行(篤子刀自)、身延往詣順道記、身延鑑となっている。

右の中で身延鑑は厳密な意味からは紀行と云うよりも案内記と云ったほうが適當かも知れないが、体裁からは紀行としてもよいと思う。右以外のものとして

- 1 身延の杖、稲懸棟隆(安永五年)
- 2 延山紀行、日擬上人(文政十三年)
- 3 並山日記、黒川春村(嘉永三年)
- 4 日本行脚文集、大淀三千風(貞享三年)

5 広重甲州道中記、安藤広重(天保十二年)

6 甲斐日記、清水浜臣(文化十四年)

7 松亨身延紀行(万延元年)

8 甲州道中記、霞江菴翠風(慶応二年)

9 甲駿道中之記、吉田兼信(文政十三年)

右の中12は昭和九年の身延教報によって知る事が出来る。3~5は甲斐資料集成日記にあり、6~9は甲斐叢書に集録されている。この外日蓮宗々学章疏目錄によれば、

身延再攀記 寿考日祐 瑞光寺八世正本在瑞光寺

身延詣書 仏寿日現 鎌倉妙本寺十一世、正本在身延

等があげられる。又内容は全然見えておらないが、小川泰堂の甲駿日記文久二年、再遊甲駿日記明治五年等のある事が小川雪夫の泰堂伝に記されており、身延に関する紀行が記されているのではないかと推測される。この外まだ知られていないものがいくつかあるうかと思うが大方の教示にまつ外ない。

明治以降のものとしては、田中智学の身延に登りてがあり、若山牧水の紀行もあると云う事であるが未見。牧水には七面山での歌があるので身延に来た事があると思うが紀行は未調査。その他についても多くの方の教示を祈るものである。

三、身延に関する紀行の中で文学的価値の高いものとして、山上、泉は安永身延紀行と身延道の記を当家の法華文学の雙璧として推賞している。右の二記は信仰の面からも又文学的の面からも優れているがこれに続くものとして日凝上

人の延山紀行と稻懸棟隆の身延の杖があげられる。日凝上人は清今日鑑上人の説師であり、宗祖五百五十遠忌大法要が京頂妙寺に於て営まれるにあたり上洛、法要を終えて更に身延に参詣した旅日記がこの延山紀行である。全編雅趣あふれ随所に和歌あり漢詩あり正に珠玉と云うべきである。この師にしてこの弟子あり詩家として名を馳せたる日鑑上人あるは当然である。

身延の杖は本居宣長の女婿の紀行である。稻懸棟隆は国学者宣長の門人でありながら排仏の考えは文中全く見られない。そののみか奥の院に参詣して

影堂の僧に申して御扉開き奉る。御影は経説誦しおはしますを拜み奉れば、物の玉ふ様に覚えて涙止らず、身に泌みていと尊し、涕きに泣きて見奉るもまばゆく、人わろく鼻打ち拭み、兎角するほどに早や御帳下りていと口惜しかくて一夜ばかりだに、此み堂に籠りて、心にこめし願など聞え奉らばやと思へど供なへる人々いざとて急げば言ふ甲斐なし。認め持ちたる発願文、又、入醍醐の長うたも二三首添へてかけまくもかしこけれと讃歎し奉る文、皆金剛櫃にをさめてなくなく門外に出づ。

と記している。

安永身延紀行は山上、泉の解説、延山紀行は齊藤要輪補註、身延の杖は望月徳英補註により身延教報に掲載されているので右については略す。

四、松亭身延紀行（甲斐叢書卷三）

紀行の冒頭に、万延となん、元改められし年の後のやよひ、わが宗祖、日蓮大士のみたま鎮まります、甲斐の困身延山に詣んと、同志のもの三人にて、江戸を出立、まづ堀の内の妙法寺なる、祖師堂に詣て、行路の無難を祈り―

とある如く、松亭等一行三人が三月二十八日に江戸を立って甲州路を甲府を経て身延に参詣し、東海道を経て江戸に帰る旅日記である。松亭が如何なる人であるか不明である。途中休息山に参詣しているが、

寺門の額兜巖魁刹と篆書にてあり高祖の尊像は日法上人の作とぞ、開帳のとき本堂に於て、寺僧螺貝を吹て遠近にしらす、この尊像余の像とは遙に換り、更に彩色を用ひす——とあり、又石和遠妙寺に参詣し、

ここに鵜飼教化の旧跡梵刹あり——御硯水と唱る井あり傍に碑を建、——その傍に、方四尺ばかりの板井あり、水清くして深さもまた四尺計り、底は青き砂にして、常に一二寸計、砂渦巻たり、人聚り題目を高声に唱ふれば、その砂涌き騰ること夥し、いよいよ声を高うすれば、いよいよ砂沸騰す、声を止むれば砂も止りて始めの如し、これを妙経の奇特とす、この水炎天にも潤ることなしとぞ——とある。

四月三日は甲府柳町佐渡屋に止宿し、翌日雨の中を西条花輪南湖を経て青柳に至り、青柳寺昌福寺に詣り、同夜は鯀沢ちとせやに宿る。翌五日雨天を小室山に参詣同夜は鯀沢上田屋に宿る。翌六日の記を見れば、

今朝晴に属す、依て人々ここなる船にて往んといふ、予てこの川、唐土函峽に髣髴として、よく船を擡くことあるよしを聞及べば、いかがあるんといふに、僉人強て乗んといふにそ、是非なくこれに乗て出す、乗組およそ三十人計り、しかるにこの川始めは聞しより平かにて斯ては何のおそれがあらんと思ひしに、名におう天神の窟といふに至る。この所都て右の方は、街道耕地うちひろきて、折々人家も見ゆるといへど、左は大方見あぐるばかりの巖石峙ちて、逆まく水これに当るときは、砕け散ること大雨のごとし、また川の中に大石多くして、溺る水これに支えられ、進ること丈余をりをり船中にうち入る、かの天神の窟といふは、この甚しきにて、川中の大石透間なし、因て船頭船を操り、嵩突立てその間を潜るここに至っては、船中ただ死を去ること一寸のみ、或は題目を高声に唱る

あり、又経文を繕て読誦するもあり、折ふし霧深くして往先見へず、実に魂を寒す——二日も続いた雨に水量の増した富士川下りはおそろしかった事と思う。身延まで船で下った一行は竹の坊に泊った。

ここより人々河原に上り往くこと数丁ならずして大門に至る、開会関といふ額を架たり、これより身延山内なり。左右樹立ある道を過て町家ある所に出る、これを身延町といふ。——翌七日身延山に参詣本堂の額に横書きで栖本法窟と而実不滅度の二面があった事を記している。八日の降誕会参詣の記に、

八日、雨降る、竹の坊立出本堂へ参る、正面あづまやを補り巳の刻過に至りて、金銅の釈迦仏を安し、白銅の盤に茶を盛供ふ、貫主出坐左右寺僧圍繞し、説経造花をふらし、三匝す、また音楽の僧十二人奏し畢て、貫首釈迦仏の像へ茶を浴せ供養し退く、参詣の人競ひてこの茶を紙に湿しまた頭に塗る、甚混雑にして老者は寄がたし、後あづまやを払ひ、高座を設け院家の僧たち出て説法す。——現在は参詣人が茶を頭に塗る事はなく、法要後の説法も行なわれていない。九日は七面山に参詣途中より雨となり、桐油蓑も役に立たず見はらし気色いはん方なしと聞いて来たのに、天雲四方にたち覆ひてただ一片の道路を見るのみと夕方赤沢に下り一泊している。七面山では本社に参詣については全然ふれていないのはどうした事か、雨のため参詣もそこそこ下山したためか。十日は身延に帰り昼食後大野山に参詣し徒歩にて南部に至り一泊、十一日本成寺に参詣し岩本泊、十二日実相寺吉原毘沙門堂に参詣し東海道を江戸に向っている。

この紀行は身延紀行と云うのであるから、身延参詣が主体になっているわけであるが、身延では諸堂の説明等に重点がおかれ、信仰上の感激は記されていない。又一篇の詩歌もものしていない。かえって身延に来るまでの間に詩歌をものしているのはどうした事だろう。

五、甲斐日記（甲斐叢書卷三）

甲斐日記一卷は清水浜臣が文化季年に甲斐の門人刑部国秀、加賀美真文、早川広海等に案内されて甲斐の名所旧蹟を歴訪した日記である。清水浜臣は江戸の人で通称玄長泊泊舎と号し、幼より和歌を好み村田春海に古学を学び後一家をなし文政七年四十九才をもって歿した。著書は癖門遺稿等數十種に及ぶ国学者である。一行は「弥生十七日朝よりくもりて日かげさゝす風ひやゝかにて雨ふり米ぬへくみゆれと、国秀にも契りおける事なれば物かわとて出たつ。」と雨をおかして道を東海道にとり、十七日程ヶ谷、十八日大磯、十九日より廿二日まで小田原（雨と知人のため源氏を講じたるため）廿三日足柄を越へ御殿場、廿四日より廿六日まで吉田（雨と病のため）廿七日三坂を越へて田中、廿八九日四月朔日同所泊、二・三日市川と日数を重ね四日は身延を目指して出発、鯉沢から同行者の一人は船にのせ一行は徒歩で富士川沿いに下った。富士川支流第一の急流早川渡船は難所として知られている。一行は飯富から下山へ渡ったが、

下山のすぐの所に早河と云う流あり、二瀬にわかれたり、一瀬は人の肩をたのみてわたりぬ、一瀬は流れのけしきたとへんにもなし、たたしら浪のたきりおつはかりにて水を色を見ず、川原のこなたな水けふりあひて袖をうるほす、舟の軸にふとき麻繩を二すちつゝむすひつけて、川むかいひに二人つゝたちて此繩もちて引ゆるむる、すなわち舟の河下へ流るゝこと一町はかり、中には舟人二人さをさせと、浪のいきほいつよくて杵さしあへず、岸なる四人引つくるに、滝浪のおとしかゝるさまおそろしとおそろし、おのれこかしこの旅あるきしてあまたの早瀬わたりみしかと、かゝるはかりなるはみしこともなくわたりしこともなし、市川のかたつかさへ要のことありてゆきしなりといひしかは、わたしもりら心のかきりいそしみたるにかくこそはあれ、大かたの旅人いかにわた

りなやむらんかしと、

恐らく三日ばかり前の雨のため水かさも増して川止めが解かれたばかりではなからうか、当時市川代官所は最高権力をもっていた。その威光で渡船も無事渡ったわけである。普通の客ならば船頭ももっと小人数で渡したのかも知れない。

未のさかり身延山にいたりつきぬ、身延はいにしへは薑生とかきしなるべし薑は草の名にて延喜式新撰字鏡和名抄などにもみえ、生は浅茅生蓬生の生にて草おひのさまをいふ詞也、此草の葉もてつくれば、蓑をもやかてみのはいふ也けり、西行上人の雨しのくみのふの里の柴垣にすたちはちむる鶯の声、とよまれしも、蓑とつゝられたり、と身延の地名について一家言をものしている。当日は菩提梯をのぼり諸堂を参拝し、

位牌堂のかたへの板筵より通本橋をわたる、光悦の筆して通本橋とかけるをかゝけたり、谷の底に水かすかにひゝきて杉の梢をみおろしつゝわたる香積厨といふ庫裏也、檜皮ふきの軒の、大きなむなきのふとき聞しにもまさりて目おとろかれぬ、今日も山端にかたふければ、かへりて旅屋にやとる。

信者であれば宿坊に泊るところを、旅屋に泊ったものと思う。翌五日は奥の院へ登山西谷に下っている。西谷については、

くれ橋を二つわたりて沢にそひくたれは涅槃塔にいたる、こゝには日常母塔日得塔ならひたてたり、釈迦堂のまへに狗子石あり、

御草庵についての記事である。釈迦堂とは今の法界堂の事と思う。

又沢水にわたせる橋を過れば談所にいたる、善学院といふ有、此みきひだりに月の寮雪の寮竹の寮柳の寮などいへ

るあり、とかくめぐりめぐりておりはてぬれば羅漢閣のかたへに出たり、旅屋へかへり物くひよろつしたゝめなどしてこゝより圃秀、啓行にわかぬ、……二人とも歌おほくよみつらねてわかれをしみあへり、身延山の惣門を出南部をへ万沢にいたる、山にのほり沢にくたり富士川のかたそはをつたひゆくいとあゆひくるし、……こよひは万沢にやとる。

早朝から奥の院へ登山し徒歩で万沢までの行程は大変だったと思う、大野の地名も記されていないので恐らく惣門からのコースは大野清子中野南部でなく、船原相又中野南部と云う近道をとったものと思う。この日記は十六日の帰郷の日まで記されているが、元来筆者は国学者であり身延には甲斐巡遊の途すがら立ち寄ったものであるため信仰者としての感動と云うものは記されておらず、毎日一首程和歌を記しておるが身延の二日はそれもない。然し筆者は學問も深く文章に長けているのでこの甲斐日記は文学的に見て優れていると思う。

浜臣は寛政四年の川肥日記、十一年伊豆日記、文化四年杉田日記、三島日記、十一年二荒日記、箱根日記、十二年都支山日記、総常日記、相模日記等多くの日記を書いている。

六、甲駿道中之記（甲斐叢書卷三）

土浦藩土屋家々臣吉田兼信が文政十三年庚寅三月武田勝頼二百五十回の遠忌に同日討死の昌恒の墓参を兼ねての道中記である。甲斐叢書卷三の帝國図書館本謄写によれば、序に、

干時文政十三年庚寅三月は、武田勝頼朝臣の二百五十回の御忌にて、殊に此日は我君の御處祖昌恒公も、同日に甲斐の国都留郡田野の奥天目山の麓にて討死なし給ひ、御墓は彼地に有とて、師なる関明信君、大久保春親ぬし御墓参りに甲斐国へ行給へるまゝ、我に供せよとのことゆへ、我も兼々願し事なれば、君に数日の暇を願ひ、師なる人

々の供して、今弥生の十四日、土浦城をかしま立す。と初めにまづ旅の趣旨を述べている。三月十四日出発した一行は目的の墓参を済ませ、甲府に至り近在の神社仏閣を参詣し、廿五日甲府発、西花輪に泊り、廿六日花輪を出発した一行は猷沢で昼食をとり舟には乗らず徒歩で身延に向った。

飯富下山など言村過て、日は山の端に入かゝる、是より身延山領に入、兼々聞しに身延山は繁昌の地と聞まゝ、よきやとりを求めんといそきて山坂道を登り下りて行とも行とも身延に出ず、日は暮て闇さはくらし、大樹の生繁りたる深山路にて、此所の岩の根かしの木の根につまつきて行なやみ、やうやうと初夜の鐘つくころ身延の町に出てやとりを求めんとすれとも旅泊なし、

とある如く下山から裏参道を杉山一里松を経て身延に着いたのである。下山から身延までは現在の道程でも一里半はあるので当時としては二里以上あったと思われるから見知らぬ樹木の茂る山道を廿六日では月もなく心細い事だったと思う。

いかゝせんと気力もたゆみ、岩か根腰打かけやすらひ居る処へ一人の老翁来りけるまゝ、宿やを尋ければ常陸衆の坊は是より七八町山を廻り行て有と言聞々、外に泊屋は有まじきやと問ければ、参詣の人にて無くは商人の宿ありとて案内し呉けるまゝ、地獄とやらにて仏に逢し心地にていとうれしく、一丁計行て伊勢屋某の家に宿る。元よりの宿やにては全く全く商人の泊る計と見へて、表の方にて小間物荒物あきなふ様子なり、奥深き処にやすむ、風呂などもなし、よふよふ隣にたちし湯なとわひてもらい、そこそこに入て食事す。魚類等なし、菜に油あげ玉味噌の汁口にも入らず、こことたらたら打臥ぬ。

先の世のむくい程かしらねども身をのふ山にくるしめる身は

此世からやみ路にまよふ心地して身のふの山に身をちゝめけり、

身延の山は繁昌の地と聞いて居たので今夜はよい宿屋に泊りのんびりしたいと思ったのに期待が裏切られてこんな歌になった。常陸関係の坊はどこであったかよく分らない。泊ったのは東谷片隈らしいから、西谷かも知れない。当時は信者は宿坊に泊るのが原則であり、宿屋も商人相手でなく、参拝者を対象とした宿屋もあっただろうに運の悪い時はこんなものかも知れない。これが信仰のための参拝ならどんな感想を持った事か。

同廿七日、天氣好、つとめて起出んと思へとも昨夜の山路に足をいたため、よふよふ辰の半は宿を立出す、是迄来りし事なれば身延山を一覽せんと、足を曳き曳き石段三百余も登りて、山上に祖師堂、御影堂、金堂、千畳敷など有先年七堂伽藍焼亡して今普請中なり、諸堂美を尽す、当山の開基は日蓮上人なり、日蓮上人文永十一年五月鎌倉を出甲州に至る、飯野、御牧、波木井、三郷の領主南部六郎と云者聞法帰依して大檀那となり、寺を出ると御影堂に南部美長の像有、日蓮姓三國氏、房州長狭郡東条之郷小港敢川村貫左衛門尉重忠之子也……。

と日蓮上人一代の略歴をあげている。身延山史によれば文政七年八月の回祿により、本堂、祖師堂その他を失い、文政八年正月祖師堂再建の斬初めを行い同十一年日環師祖堂普請に従事せる旨記しあり、続いて文政十二年の回祿により諸堂宇のほとんどを失った事が記されている。諸堂美を尽すとあるも山史によれば二十間四面の祖師堂の外見るべき堂宇はなく、金堂、千畳敷は何を指しているか不明。日蓮上人の伝記については、何によったか分らないが身延鑑には伝記は記されていないので別の何かによったものと思う。身延一覽を済ませた一行は大野に出て船で岩淵まで下った。恐らく信仰の登詣ならば大野山本遠寺にも参詣した事だろうし小室山にも参詣した事だろう。

名にしおふ富士川の急流矢の如し、……船の長四間余にて板薄く、幅四五尺なり、板は杉にあらず松にも有らぬね

ば木なり、此節天氣つゞきければ、水もひかれ折々岩根に船そのあたりてむねにひゞきて気味悪し……風景言語絶、実に仙境の如し……南部の河岸に船を付て休

行春に乗合多き小船かな

此処の女共田楽餅団子等持来りおしうりす、かわねは色々の事言てのゝしるさまいとけふ有、……大野より岩淵まで水上十三里、四ツ過に船にのり八ツ前に岩淵に至る、二度乗間敷急流なり、……

今の時間にして約五時間の富士川下りは余程こたえたらしい。一行は日数廿八日(雨天五日)東海道を経て土浦に帰った。

身延へは夜著いて翌日は富士川を船で下り興津に泊っているのを見ると大変忙しい旅行である。

七、甲州道中記(甲斐叢書卷三)

序文に、こゝに安藤助五郎なる者、ひと昔江戸へ参りをり其内に甲州にしばし足をとめたる時に、所々にて見聞したるを覚えおりて伊奈道中より、甲州、信州等の名所旧跡、神社、堂塔、山水等を心にたくみ覚えぬたるを、野子におりおり嘶しなどし、または図にかけりて見せをかしき嘶し等聞たるを、このたび爐へんに籠りて、つれづれの筆の足にまかして、其図等をほぐにかゝして、一帖の本に仕立て、長く甲州記と対して……とあり、安藤の語るところをもとにして野子即ち霞江庵翠風が慶応二年十二月に記したもので、飯田を發し諏訪路より甲州路を通り江戸に帰る道中記になっている。身延に関するところをあげると、

一是より身延山道中をしるす、身延山は甲府より南道中なり、甲府柳町三丁目問屋より西条村迄一里あり、其より東南郷古市場、ばら沢、青柳宿を通りかじか沢に出る西条村よりかじか沢駅迄三里八丁なり。……畷沢奥小室山の

開基は山伏なり、祖師日蓮上人と身延山に有て大石をいのり上る、……とあり法論石を身延としている。

山伏恐驚いて出家し祖師の弟子と成、日伝と改、当山を開くなり、山の判ほら貝なり、(山の判とは恐らく参拝記念の朱印のことと思う)富士川下りについては、

右富士川流かじか沢より身延へ六里、身延より東海道岩淵迄は十二里余なり、野子朝四ツ時より舟に乗り、岩淵へ着致し候は八ツ時なり、二時十八里乗下すなり関東第一の大早川なり、船道大難所々にあり、早川落、屏風岩、天神ヶ滝、小豆岩、釜柴川など云大難所あり、と先づあらましを記し、更に、野子此船にて下る時、

伊豆の元船の船頭此天神ヶ滝へ来る迄富士川富士川と恐ると雖、たかが川なり何程の事があるべきと笑ひ居たり、且伊豆下田の、はなていしの弥陀を越時は、千石船の帆柱見へずと大風に嘯し居候処、天神ヶ滝に來り左右の岩の中船走り通る時、岩と船とにせかれ水煙り七八尺も立時、笑ひ居たりし船頭青くなり扱て恐ろしき川なり何程水練を得たり共早瀬におよぐ事いたしがたし、水中に入れば岩角にうたれたる時はみちんになるべし、……と太平洋の荒濤に鍛えた船頭もこの急流の難所には驚くばかり、千石船と高瀬船との対比は面白い。そして船頭は、

処の人日本一と申候が実に誠なり、祖師日蓮上人御意には、十度参る処壹度参りても我身延に有て受るなり、必ず富士川渡りくれなと被仰候……と云々とあるを見ると当時はそんな事も云って居たらしい。これに統いて船の就航を便ならしめるため川の流を変えるため、

身延山の上人……式万両迄は寺より助力可致と被仰候処、一同に申候は金銀人力にては不及候よし誠に富士川筋一度は船に乗てみぬ時は咄にならずと存、駿河岩淵迄乗候得共、二度可乗川不有と存候、……昔も今も人の心は変わぬものである。かじか沢より二里切石を過ぎて早川の渡し場であるが、十四年以前は右に流れていたが忽ち川瀬が変

り半里も向うを流れるようになるので、壱里ばかりは田地を作る事が出来ない、七面山の奥から流れ出る早川は富士川に流れ込んで、水は風色をしていて、

落水矢をいる如し、真一文字に川瀬に突入る。川先の向ふが屏風岩なり。屏風の高さ四五十間も可有之、一枚岩なりと記し、自分が甲府に居った時三艘も打割れ船頭もろ共、兎人も助かる者なく流死し、度々こう云う事があるので、夫故屏風岩の上に、

いつにても線香立て、帛候有様を見て、船にのりながら心持不宜敷候。とある。身延山については、波木井殿が祖師の弟子となり持山を寄付した事を記し、

抑々身延山は前に富士川の大川有、左右四五里の四方は山々重なり、身延山祖師堂より奥院迄五十町登る、水の手はよし、無双の靈地ようかいけんご成山故、武田信玄此山にて城を築かんと、山を渡すべき由被申候処……とあり、信玄身延攻めと七面大明神の威光について述べている。更に、

身延山久遠寺の図は右にあらはず如く、松杉しんしんとして山林をなせり、まことに仏法の靈地、法華妙経の林なり。祖師堂廿八間四面、本堂十八間四面、昔は三十三間四面と云、位牌堂十六間四面、祖師堂天井極彩色、菊の丸前の柱金箔なり、三つ具足の台長さ三間有、金丸の周り三かかえ有、祖師の御ずしは惣金、其外は忘れ候事、前に御経の机五つ斗ならびある、出家行通ひ被致候をはるかに見候処、人形の様、にちいさく見へ申候、とあり人形の様、にちいさく見えたと言うのは大分鼓張である。

山門の中十三間有、二王尊誠にあらたにて、右の二王尊は参詣をゆるさず、金の網張つめ御姿見るる不被致、左の二王尊へ病人狐つきこもるなり、私一夜こもり候処、夜九つ時八つ時と申候刻何となく物すこくなり、尤毎夜々々

通夜の人たゆる事無し、参詣致候時は三四十人斗もこもり居候処、せめて大題目にていのり候と病人狐つきなどはしせんと御ひざの下へ引すへられ、声はキウキウと云て泣く、誠に恐しくて一心にいのり申候外、御嘶しも御座候へ共、もったい無く故あらあ筆をさしおく、とあり以下は昔身延に日荷上人と云僧有……と例の日荷上人碁打ちの伝説について記している、奥の院については、道程五拾町と日朗上人の水屋を記している。次には七面大明神の伝説を記し更に感意(井)坊―赤沢―七面山の道のりを記し、

実に三十町より上はほうて登る様に存じ候事、七面山御坊壱所穴いるり、私共十月登山参り八九合目より雪日を登り、足ちぎるゝ様に存、一もくさんに御台所へはり込候処、参詣人と見へとめてヤレ、ゆるへはり御入あれと、皆々被申候故、穴ゆるりへはいり候処、材木の様成る木を切、二三本くべ之有候ゆへ体をとくとあたゝめ、其上御膳被下候て酒も有之候故、被下候上にて参詣仕候、其上一夜御坊にてとまる、夜中の物すごき事いわんかたなし、夜中の物すごき事とは、おこもりの様子なのだらうか、七面山については文外本堂の大きさ、御池の水の浪の様子で大明神の御機嫌が分る事、悪人が登山すれば黄水を吐く、山中に四十八湖ある事等が記され、身延山の名物として湯葉かや入のあめ数玉をあげている。

身延についての記事の大意はこの程度であるが、富士川下りの記事の中に、

此釜一名鍋子の口と云此処へ船かゝる時、先の竹のいかいを持たる船頭妙法蓮華経と大声に云とともに、櫓をおす者如来ちうりやうと云て、皆大音に御経をよんで矢をいる如く下り来る。とあるが、富士川下りの壯観が眼前に髣髴とする。

この道中記はいわば旅行案内書とも云うべきもので、文学的価値は高くないと思うが、当時の身延参拝の様子を知

る上ではよい参考文献と云える。

八、並山日記（甲斐志料集成）

黒川春村が嘉永三年三月江戸を立って郡内より甲斐に入り神社仏閣を巡拝しながら歟沢より身延を経て東海道を江戸に至る五十日間の日記である。

春村は通称次郎左衛門、後主水と改む。浅草庵、薄斎、葵園と号し初め和歌俳諧を学び後国学を学んだ。清水浜臣伴信友等と交り、宣長の学説に従ひ性恭謙廉直にして名門貴顕に入るを好まず功名を貪る事なく著書數十種に及んでいる。

並山日記は藤原信古の序に、かくてこそみまかひもあれ並山のなみなならぬやまふみのあとと歌われており全七巻よりなり、巻の九に身延が記されている。四月二十一日は雨天を小室山に参詣し歟沢に一泊している。法論石の故事は古今著聞集巻二の淨藏法師の故事と大変よく似ている。「それもこれもまことにあらむ。日蓮ふるきをまねひたるやあらむ、もし小室のは附会にやあらむ。いつれともさいたためかたし、」と記している。翌二十二日小雨の中を徒歩で身延へ向い早川を渡り下山から裏参道を通り朝師堂を経て町中に出て熊王某の家に宿をとった。

歟沢より駿河の国岩淵のわたりまでこの川を船よりくたれば十八里を二時はかりにいきつくとかち、ゆく人はいとまれなりとなむ。されどかゝる山川のはや瀬をひたくりに下る船は箭をいることくはしるからに、ともすれば敵に打つけたちまちにくつかへりて、二つなき命を失ふものをりをりすくならずとなむ。既に昨日も岩淵の船頭とかいひて、年のほとはまだはたちにも足らぬか落ちいりて失せにたりとて、今日は船の上り下りをもとゝめぬ。

急かぬ旅のみちをゆくとして、さはかり危ふき目をやは見むとて、もとよりかち路のあらましなりけり。

富士川下りは今日の飛行機よりもおそろしかった事か伺える。この日の沿道の事が細かに記されているが終りに甲斐国史身延鏡身延伽藍記を引いて波木井氏や身延開闢について簡単に記しこの日の筆をおいている。明けて廿三日は菩提梯をのぼり堂に向ふ舞台を見て、会式に舞う延年の舞は古今著聞集の児延年の遺風らしいが今は宮根山日光山いつくしまのみやのみみだけであらう。延年ノ舞考証と名づけて別に委しく書き綴っておいたと記している。身延の延年の舞は今絶えてしまったがこの考証があれば復原の手がかりになるかも知れない。日記は更に謡曲の七面を引いて児の舞を説明している。祖師堂の額を見て

あつまの何かしの中納言殿とて、いまの世に聞え高き君のおほむ筆なり。高さ九尺計り幅二丈あまりもあるべし。栖神法窟といふ四字あり甚ううるはしうかい記るさせ給へり。まことやこの君の御本性は、こよなく仏道をいませ給ふとやうに、世界にいひしらふめるを、如何に思はし召してかくは物せさせ給ひけむとあやしく珍らかに思ほえられたり。

大変な仏教嫌いと云いふらされている人がどうしてこんな額を書いたのかと不思議がっている。位牌堂の前で近衛流の筆法のつたない狂歌が石にほられているのをよく見ると自分の叔父の書いたもので、「いかなるえせ人にあつらへられてか、かゝる人わらへものかきけむとあさまし。」となげいている。奥の院七面山は又の機会にして午の時に山を下り榎の木峠を通り南部に泊っている。筆者は国学者であり文章に優れているが参詣の感想は余り記されていない。然し「修理小屋あまた建つゝけて飛弾たくみとも数百人入みちたり」云々等文政の回祿後の諸堂復興の状況を知る為の重要な紀行である。

筆者大淀三千風は名は友輪勢州射和村の人で異名湖山飛散人無不非軒呑空法師と称し、貞享元禄頃の人と云う。若くして俳道に志した後「世は定なきこそをかしけれ」と九ヶ条を首にかけ各地を行脚し日本行脚文集全七巻を記した。身延に関するものは第六巻の富士詣に記されている。九ヶ条の中には第一不惜身命を思定、今日初の境界、無常迅速夢幻泡影忘るまじき事。を始め色欲身欲名聞欲を離るべき事。山賊追剽等に逢ば裸にて渡すべし。船賃木賃茶代少しもねざるまじき事、文筆所望なきに書まじき事。但し望む人あらは貴賤を不撰一言も否といふ詞出す間敷なり。……その他種々の自戒があり、右の九ヶ条仏神に誓ひ心戒を定るものなり。若此意趣を破る心ざし出ば、即歩に帰るべし。若病死する事あらば、行脚の日記と此ヶ条を古郷へ送給ふべし。と全七巻の沿輪に及んでいる事を見れば道念堅固であつた事が知られる。

文章は漢語をたくみに操り仏教に通じ仏語を自在に駆使している。旅程は貞享ひのえとらみなつきかみのこのか即ち貞享三年六月九日に筆をおこし箱根吉田を経て富士山に登つた。山頂の記の一端をあげると

邪正不二門の前には平等一輪の夕陽、和光の影いたらぬ隈なし。げに神仏和合、両部一連の山なれば上求菩提の峯には、日薬迦の三如来定理給うて、利物の常雪きゆる事なく、色香実相の中宮には、本有の真櫛常色さかえ、下化衆生の下宮は、同塵の霧へだつる谷なし。

朗読すれば正に彼の平家物語の大原御幸を思わせるものがある。富士山頂に三日通夜し大宮に下山し徒歩にて身延に向つた。

からぶじて三日ばかりに甲州身延山の総門にいり、山本房にて当山景眺の一軸長編略。此次に物語す。

日蓮上人開基甲州身延山久遠寺の景台、かねて耳にふれしは物かは、第一殊勝地、本朝三二の法嶺なり。仏法繁

花といひ、仏閣の奇麗心詞のべかたし。堂塔社廟、学室客殿所三十余棟、達中六十房、門前町家二百余宇、奥院御坂五十町、道路左右の石塔玉をみがき、遠景又目をさらせり。是より七面明神まで四里のうち、五十町の坂の嶺に美麗の社頭、霊水の池、遠光は富士を始として、白根につゞく四方の山、口をふたぎしなり。やがて宿坊にかへり当住持日晚上人に美談して、一軸即座にかきしが、長編略す。
残念なれども、

肉団のかをり嵐は身延かな

その峯の鷲の尾につくみのぶ山うへみぬ法の古集成けり

偕寺中かなたこなたにまねかれ、庭の記屏風腰ばり何くれと書投、四日逗留して同廿二日甲府柳町伴野氏につく。以上が身延に関する記事の全てである。日晚上人と対面して一軸即席に書いたらしいが今は知る由もない。あちこち所望され書いて四日も逗留したと云うが、まだそれらしきものを見た事が無い。

十、広重甲州道中記（甲斐志料集成日記）

甲斐志料集成には、天保二年丑とし卯月日々の記を広重甲州道中記と改題して収めている。広重は浮世絵師として名をなしていて優れた作品が多い。甲州道中記では肝心の身延に関する部分の中絶しているが篇者の註によれば、御嶽や身延山へも参り、富士川も下ったらしく、別冊の写生帖があつて云々とあり、日記が中絶しているのは大変残念な事である。

十一、以上身延に関する紀行について大変雑駁な考察を試みたが、身延に関する紀行の意外に多い事に驚いた。又筆者が僧侶より国学者のものが多く事が目立つ。これは国学が盛になるにつれ古典研究が進み古事記万葉集を始め古典

にあらわれた歴史上の土地への関心が深くなった事によるものと思う。彼等にとってまだ見ぬ異国情緒を楽しみながら学問上の知己に合って意見を交し和歌を詠じ筆のすさみを日記につづる事が一種の流行であったのかも知れない。

今回は明治以前の作品を対象としたがまだまだかくれた資料があると思われるので大方の御教示を願ひそれらを更に比較対照して往古の身延について探求したいと思う。